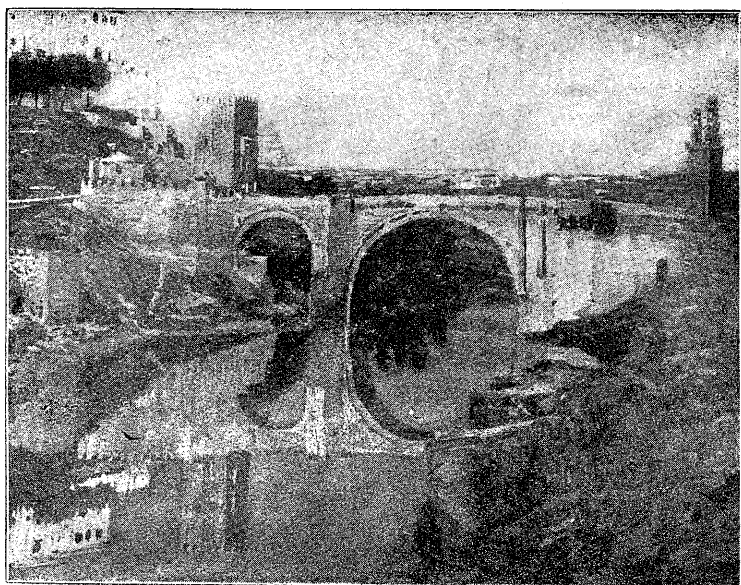


本森之助氏の『夕風』、漁火』共に努力を見るが、之を四分一位に縮少した方が却て味があらうと思はれる、矢張り『雨の山』が最も佳い、跡見泰氏の諸作は能く自然の優さしみを描く、そして圖様が氣が利いて居る、『入江』の如きが其の適例であらう、『泊船』は静かな河流の氣持を表して居る、小林鍾吉氏の作では『初夏の堤』みをつくしを好む、岡野榮氏の富士亦佳し。

柳敬助氏の『雪の景』は特色のある作である、と云ふのは能く自然の印象を直寫して居るので、何處となく其描寫に、我々に親しい感起させるものがあるからである、南薫造氏の水彩畫は我在來の畫風と異つて居る、總てが穏和で快い、矢崎千代治氏の『四條』は圖が面白い、此三氏も亦新歸朝者である。

長原孝太郎氏の『新聞紙』は眞面目な畫である、氏が研究的態度の堅實にして世の風潮を追はぬのは『アルカンタラ橋』

湯淺一郎筆

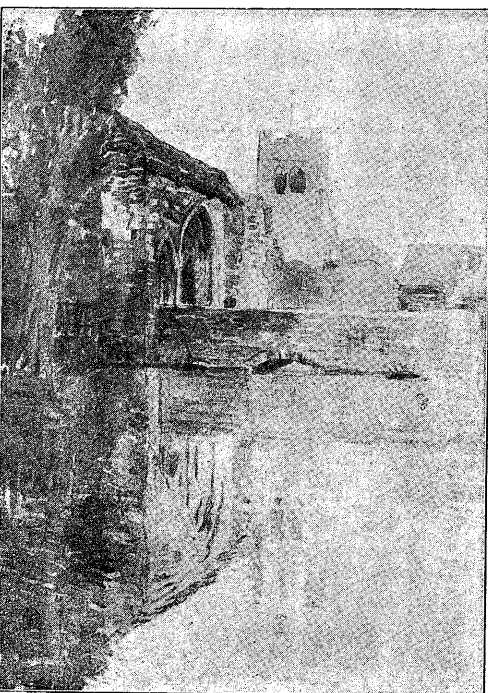


敬服であるが、吾人は氏に向つて更により大なる期待を有して居る、請ふ自重せよ、中村勝治郎氏は花卉に専門を定めたい、『殘菊』好し。青年諸氏の進歩には年々驚かされる、前途の多望なること、古い言葉だが、春の海の如くとも言はうか。



『少女』 岡田三郎助筆

青山熊治氏の『アイヌ』は其努力の大なるを、多少の微瑕があつても、大體に於ける成功を認めねばならぬ、焚火を中心として、それが映射の面白みを描きたる構圖に無理なく、人物の表情態度も自然に近い、人は和田三造氏の『燐燻』に比して、作の前後を云々するが、余は作者が製作の興を實境に獲來りたる由を傳聞した。若し一步を譲つて、假りに作者が『燐燻』を見て後、此圖を企てたとするも、摸倣剽竊にあらざる限り、斯の如きことは、作の成敗に何の關係があらうぞ。之は技術上多少未熟の點があつても、佳作の一に數へて宜からう。熊谷守一氏の『蝶死』は餘りに聞きに失して、余は何等の感興をも覺えない。正宗得三郎氏の『落椿』は琅玕洞で見方が佳かつた。

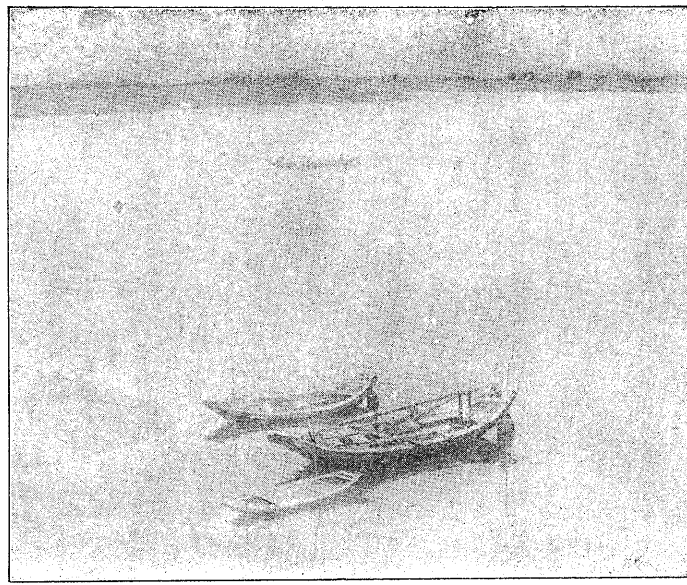


『寺古のムタルワ』 南薫造筆

岡吉枝氏の『少女』は可憐な出来である、被服の色調に落付があつて優雅である。中野營三氏の『山路の夕』は和らかな色調と、穏やかな筆致に静かな山村を想はしめ、『砂濱』は構圖に奇趣がある。山口亮一氏の『秋の日』は屋後を照らせる小春日の温かさを寫し、『神戸オリエンタルホテル』は瀟洒なる描法、某大家は之を評して、フィスターを偲ぶと謂つた。山脇信徳氏の『午前』、『雨の夕』は共に同一の場所に於て、自然の或る景象の特徵を研究せんとしたもので、モノあたりの研究法に倣ふたの見える、前者の方が印象が深いと見える、後者は稍青色が勝ち過ぎたと思ふ。近藤重一氏の『雪の夕』は情致がある、筆致も佳い。小林眞二氏の

『静かな流』色調が少しく暗いかと思ふが、静かな穏やかな感じが佳い、『赤城街道の夕照』夕陽の華やかに映じたる山の描寫が快い、其他山形駒太郎氏の『朝風』、岸田劉生氏の『雨』、香田勝太氏の『盤臺の魚』など數へ来れば際限もないが、紙面が許さぬから略する。仔細に見来り見去れば青年畫家の技術の一般に進歩せることを認めざるを得ぬ。

参考室は洵に難有い、有益だ。湯淺氏摸寫のヴェラスケスの傑作、名だけ聞垂れる、『緞女』、『官女』の大作にも學ぶべきところは多いが、中にも『エソツポ』と『メニツポ』には限りなき意味を感得する、雷に古哲の性格、風采

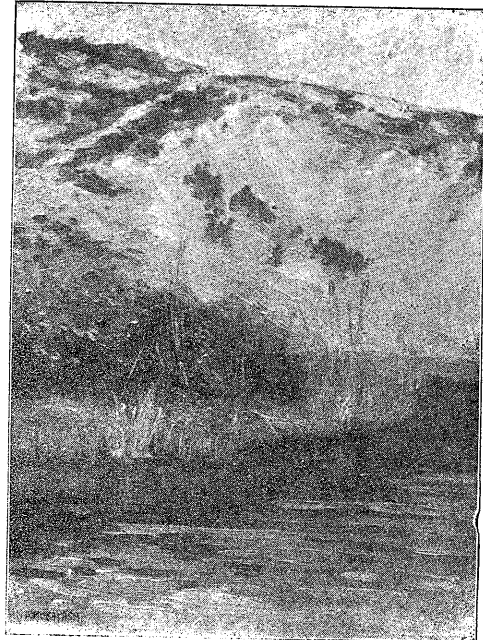


『泊船』

跡見泰筆

やうと云ふ意氣込だとは豫て會員某々氏から聞き及んで居たが、果して會員諸氏の努力は盛んなものである。出品も白馬會の餘りに多數なるに鑑みて、大に嚴選することになつたと、開會前に聞いたが、成る程陳列も頗る整つて居る。入場先づ多數の水畫に眼を奪はれる、水畫は此會の特色と見られて居るだけあつて、佳作が少くない。望月省三氏の『ゆく秋』は、場所の選み方が佳い、うらさびしい心持が出て居る。夏目七策氏の『静物は筆が大きくて、それで能く物質の説明が描かれ

『初夏の堤』 小林鍾吉筆



太平洋畫會所觀

同 人
今年白馬會と同時に開會するから、大に競争し

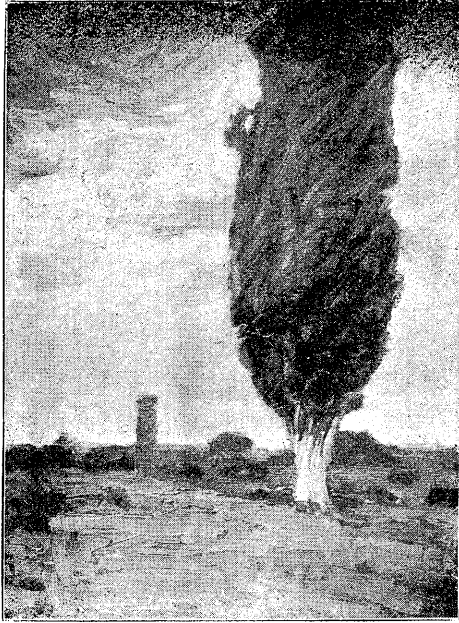


て居る、色が稍生ま過ぎるのと、組立も充分ではない。人物に至つては、研究が足らぬ。吉田博氏は十四點の多きを出して居る、それ／＼面白いが、色調が稍濃厚強烈に過ぎて、却て自然の感を損じはせぬかと思ふ。『曇り日』『瀑布』なども佳いが、余は『越後の春』に最も穏やかなる自然の面影の寫されたるを喜ぶ。

石井柏亭氏の出品には、氏獨特の筆致と構圖とに面白味がある、『房州布良』が最も骨折つてある、和らかな色調、岩や草の描寫も巧みである。『三本木』には京都の特徴が出て居る、氏は奈良京都あたりの建物の特徴を描くに巧みだ、余は常に氏の奈良の街の畫を見る毎に、彼の古き寂しき市を思ひ浮ぶのである。氏は恐らく最も多く奈良の街を好む人ではないかと想像して居る、『雨やみ』なども畫としては兎も角、一見奈良を思はしめる。大下藤次郎氏の今年の出品は、構圖に興味を加へ

滞歐紀念スケッチ

藤島武二筆



た、色が優さしい、『習作風景』『淵』などが好い。木村梁一氏の『巴里近郊』『瑞西山中』は彼地の風物を偲ばしめる。中川八郎氏の『伊豆の海』は輕巧である。赤城泰舒氏の『午後四時』『神田川』は穏やかな心持の佳い畫だ。相田寅彦氏の『雲のかげ』は雲も面白く、歩み行く小供、路上の雞の群、皆活動して居る、温かな色調が快い。織田一磨氏の『奈良の曇り日』『紀の國坂の曇り日』共に、色彩にも筆致にも一種の情調を含んで居る。高村眞夫氏のパステルは随分多數に出て居る、皮膚の色も、筋肉の説明も其研究が皮相に止まつて居ないかと、失禮ながら、思つた。ブク／＼肥り過ぎたる女の肉體は不快なものだ。スタデーの四が、就中見るべきものであらう。

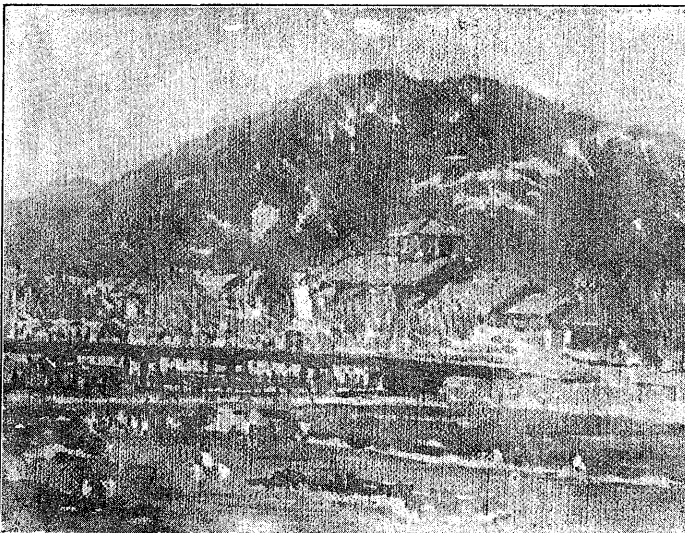


筆光弘澤中

『線新』

は描寫が稍平たく過ぎなかつたか、光の研究が足らなかつた爲ではないか。腕のあたりデッサンが怪しく見える。出品十五點、勉強敬服である。吉田博氏の『妙高山』は、氏の色調を示せる大作で、例に依つて其の企圖の壯大と其勢力の旺盛を見る。雪を戴く遠山は和かく、圖が大いので全圖の色調も割合に穩かであるが、構圖が聊かパノラマめく感がありはしないか。氏の出品は水畫油畫を通じて二十二點、最大多數である、壯心勃々たる勵精倦まざるは氏の特性である。小杉未醒氏の今年の作は頗る面目を改めた、と云ふのは、例の漫畫風を全然放つて、眞面目に自然の情趣を捉へやうとして居るか

らであらう、『浦島』は裝飾畫として成功に近い。『若王子道』は落着いた出來であるが、空が生ま／＼しい、其他も總て自然の景趣の一面を捉へ得て居るが、今一段觀察の精しからんことを望む。寺澤孝太郎氏の『春』は幾多の失はあらんも、其努力を買はねばならぬ、構圖は悪くはない、『夜』の方は燈火の研究に興味がある。鹿子木孟郎氏の作では、三三四の『河原の夜』がちよつと面白い。



筆治代千崎矢

『條四』

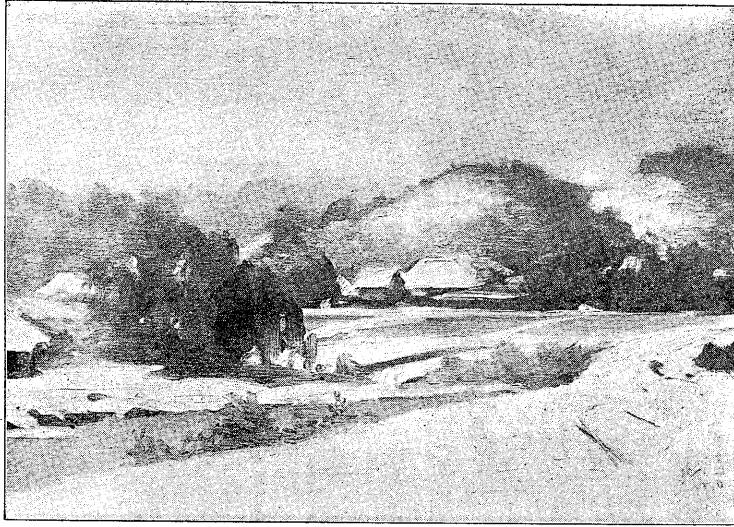
長田俊雄氏の『朝の光』は、未だ到らぬところがあつた、曙の光の森を照らし野に充ち渡らんとする感じを畫いて、ちよつと其心持を出して居る、近景から遠景への移り行きが、稍遠近法を誤つて居るが、廣々とした野の趣はある。石川寅治氏の『家庭の人』は眞面目な出來で、毎時もの様に、てか／＼した光澤を出さうとしない處がよい。河合新造氏の『春の川邊』『日本アルプス』共に書き



筆郎一淺湯

『娘村』

過ぎて、却て興を逸した。
 中川八郎氏の『牧場』は穏やかな書趣に能く自然の情調を得て居る、心持の佳い繪である、但中景の林のあたりが弱は過ぎる、『高原の夕』は色調に味がある、佳作である。
 磯部忠一氏は昨年と略ぼ同一の傾向を持して居る『水の濤』が面白い、森の一端と、其影とが静かな水に映つる趣を巧に寫して得て居る、森は稍粗放に過ぎて平たくなつたが、水に映つれる空が佳い。
 石井柏亭氏の『熊野川』は、例に依つて構圖が面白い、遠景の山と、雲と、淡くつぶした市街の遠見が巧に出來て居る。



『雪の景』 柳 敬 助 筆

中村不折氏の『仙人』は、寧ろ仙人なごくせず、單に裸體研究とする方がよい、瓢箪は持つて居れども、風貌は毫も仙骨を帯びざるモデル其者である。習作とせず、畫に纏める所が此派の特色か。
 彫刻の部では、新海竹太郎氏は幾多の半肉彫に一種の書趣を得んと試みて居る、『板橋行』の構圖は嶄新、馬も巧に出來た、『海水浴』は變つたものだ。藤井浩祐氏の髪を洗ふ女は味のあるものである。姿致も面白い。
 北村四海氏の大理石彫は皆な例に依つて美しくいものである。『赫夜姫』おつくりなど皆悪くはないが、面貌が孰れも同型である爲か、聊か物足ら

『少女』 岡 吉 枝 筆

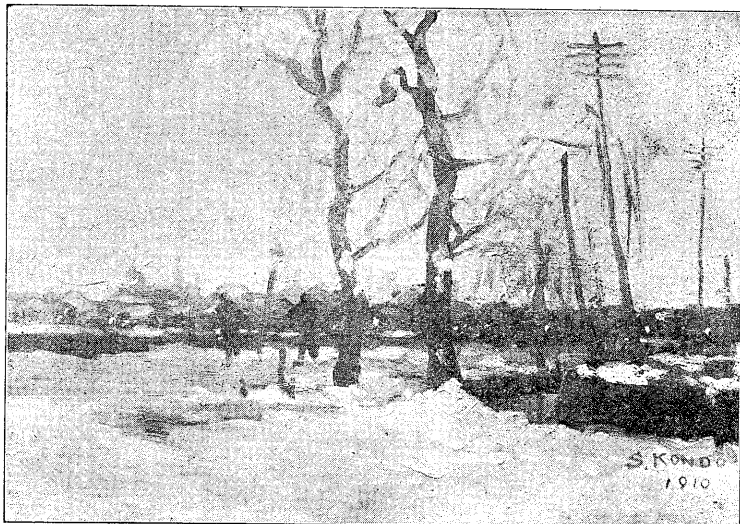


ぬ。氏の趣味は静穩な女性美にあると見える、朝倉文夫氏の胸像は、手法軽く、而かも人物の性格を表はして居る。(五月二十日)

諸家の兩展覽會談

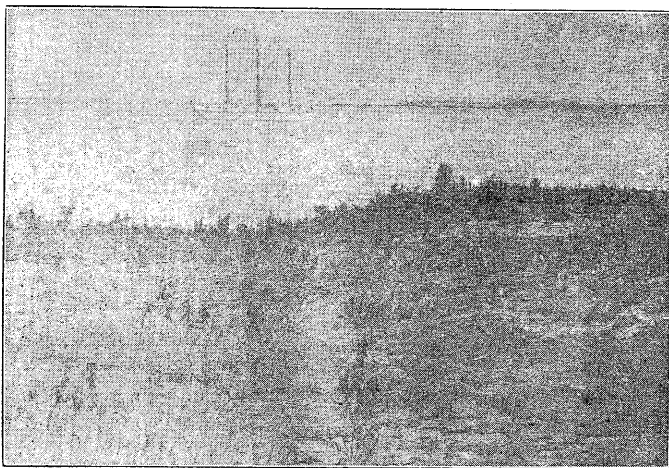
岩村透男談

記者一夕岩村教授をその邸に訪ひ談會し自馬太平洋兩展覽會のこと及び、『何かお感じになつたことはございませぬか』とお訊ねすると、男は緩に烟草を噛らしながら語る。
 何しろあの通り非常に澤山な數なのだから改まつての批評となると難事だ。尠し計り頭に残つてゐる處をお話しやう。



『夕の雪』 近 藤 重 一 筆

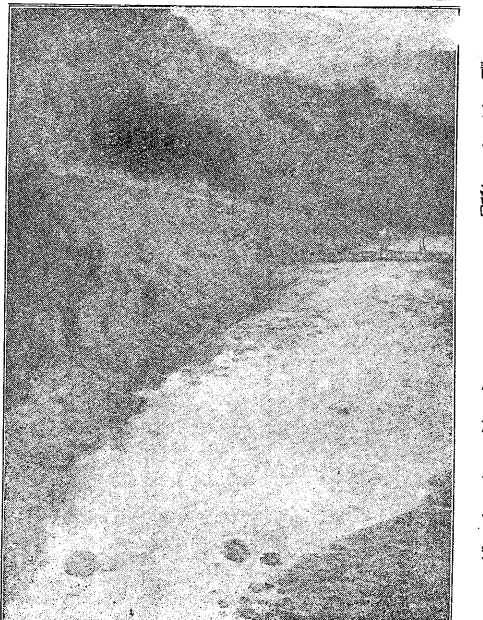
今度の展覽會は兩方を通じて所謂大作と云ふ物は甚だ少い。小品が多數を占めてゐる。世間の人の中にはこれを一概に擯斥する者もあるが、併し畫幅の大といふことは何も直接美術上の眞價値に關係はしない。その時その時に受け入れた印象を描かうと云ふには必ずしも面積の大作たるを要しない。これを文學の方から考へて見ても、『月張月』とか、アレキサンダー・デューマの小説のやうな浩瀚な物は今の世には讀まれなくなつて、却つて短



『朝風』 山形 駒 太郎 筆

い形式のうちには、生きた人々の姿を味ふやうになつて來た。美術界の傾向も丁度それと同一ことであらうと思ふ。それから少くも説教じみた話ではあるが、今度の青年畫家の作品中には、その畫が表現せんとする感じと、その手法とが相伴はないように見受けられるのがある。たとへば明るい鮮やかな、光線や空氣の微細な震動を現はさうといふやうな畫には、點や短線を用ふる所謂印象派の描方は甚だ適當してゐるが、之に反して沈んだ重い感じを現はさうといふには、手法もそれに叶つたシットリしたものではないばなるまい。今度出た畫の中にはその區別を考へてゐないが爲に、面白い撰擇が無駄になつてしまつたのがある。
 大體に於て撰ばれたる圖題が單一に流れず、あらゆる方面に興味を求めて、それ／＼作家の特性を發揮しようと云ふ努力は甚だ心持が好い。
 青山君の蝦夷人酒宴の圖は達者なものだ。兎角人

『静かな流』 小林 眞 二 筆



『雨』 岸田 劉 生 筆

